

だれが罪を赦すことができるか

マルコの福音書 2章 1-12節

はじめに

今日から四回に分けて、「信仰に生きる」というテーマで説教をしていきたいと思います。第一回目の今日は、イエス様による中風の人への癒しの出来事から「信仰に生きる」ということを学んでいきたいと思います。

イエス様は、「カペナウム」というガリラヤ地方の町で、ある家におられました。この家はおそらく、弟子のペテロの家であったと思います。イエス様はガリラヤ地方全体で、みことばを教え、病人を癒やしたりしていたので、すでに有名でした。ですからイエス様が、カペナウムのペテロの家におられることが知れ渡ると、多くの人が集まって来たのです。そして、ペテロの家は戸口のところまで隙間もないほど満員になってしまったのです。そこでイエス様は、集まって来た人々に、みことばを話しておられたのです。

1. 彼らの信仰を見て

すると、家の中の人々が驚くような出来事が起こります。何とイエス様が話しておられる真上の屋根がはがされ、穴が開けられ、ひとりの人が寝床ごと降り降ろされて来たのです。この人は、「中風の人」で、脳卒中などにより体の一部や半分が麻痺している人でした。彼は自分で立ち上がることができず、寝たきりだったようです。ですから、寝床のまま、屋根から降り降ろされて、イエス様のもとに連れて来られたのです。

彼を担いで来て、屋根から降り降ろしたのは、四人の人でした。この中風の人と四人の人の関係は分かりません。家族であったのか、友人であったのか分かりません。しかしとにかく、彼をイエス様のもとに連れて来て、彼を癒やしてもらおうと強く願ったのでしょう。

しかしペテロの家に着いて見ると、もうすでに満員で、寝床のままの彼をイエス様に近づけることは到底できませんでした。普通なら、人々が帰るまでしばらく外で待ってよとか、また別の機会にしようと思うかもしれませんが、彼らにはそのような考えはありませんでした。彼らは、待つことも、別の機会にすることもなく、今すぐに中風の人をイエス様に近づけようとするのです。そこで彼らが考えたのは、屋上に上って、イエス様がおられるあたりの屋根をはがして、穴を開けて、ロープか何かで寝床ごと降り降ろするという方法でした。

彼らは、人の家を壊してまで、中風の人をイエス様のもとに連れて行こうとしたのです。イエス様なら彼を癒してくれる、イエス様ならきっと何とかしてくれると信じたからです。彼らは、人々のことを気にする余裕はありませんでした。人々に迷惑がられるとか、家の持ち主のペテロに怒られるとか、そういうことを考えませんでした。それよりも、イエス様へ

の信仰が上回っていたのです。絶対にこの機会を逃してはならない、イエス様ならきっと何とかしてくれる、そういう思いが何よりも強かったのです。

彼らの行動は、人々には賛否両論あったかもしれませんが。では、イエス様は彼らの行動をどのように見たのでしょうか。5節には、こうあります。「**イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、『子よ、あなたの罪は赦された』と言われた**」。彼らの行動は、ここでは確かに「信仰」と呼ばれています。そしてイエス様は、彼らの信仰に答えて、中風の人の罪を赦されたのです。

「彼らの信仰」とは、四人の人と中風の人を含めた五人の信仰でしょう。イエス様は、中風の人の信仰を見て、彼の罪を赦されたのではなく、中風の人を含めた五人の信仰を見て、彼の罪を赦されたのです。彼の罪が赦されるために、イエス様は四人の人の信仰をも見られたのです。ここで私たちが教えられることは、ひとりの人の罪が赦される、ひとりの人が救われるためには、その人の周りにいる人の信仰も大切であるということです。その人の救いのために祈っている人の信仰を、イエス様は見ておられるのではないのでしょうか。

イエス様は、外で待つだけでなく、別の機会にするのではなく、屋根をはがして、穴を開けて、寝床をつり降ろしてイエス様に近づこうとする、その彼らの行動を「信仰」と呼ばれるのです。今日の聖書箇所には、彼らの言葉は一言も書かれていません。書かれているのは、彼らの行動だけです。そしてその彼らの行動のうちに、イエス様は「信仰」を見たのです。

私たちは、信仰の告白を大切にします。使徒パウロも、「**人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです**」(ローマ 10:10)と言っています。しかしヤコブは、こうも言っています。「**だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがないなら、何の役に立つでしょうか。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか**」(ヤコブ 2:14)「**私は行いによって、自分の信仰をあなたに見せてあげます**」(ヤコブ 2:18)。信仰は、もちろん口で告白するものです。しかしその信仰は、見えるものへと現わさなければならぬのです。イエス様は、彼らの信仰を聞いて、中風の人の罪を赦されたのではなく、彼らの信仰を見て、中風の人の罪を赦されたのです。イエス様は、私たちの信仰を、祈りにおいて聞いておられるでしょう。しかしイエス様は同時に、私たちの信仰を、行動において見ておられるのではないのでしょうか。

2. **神だけが罪を赦すことができる**

それにしても、イエス様はなぜ中風の人をまず癒やすのではなく、彼の罪を赦されたのでしょうか。ある人は、この中風の人が何かひどい罪を犯していて、罪責感に苦しんでいたのを、イエス様は見抜いて、まず彼の罪を赦されたと考えます。確かにイエス様は、人の心の中を見抜かれる方です。今日の聖書箇所でも、イエス様は律法学者たちの心の中を見抜かれます。しかし、それは想像の域を出ません。イエス様がなぜ、彼を癒やす前にまず彼の罪を赦されたのかは分かりません。しかし確かなことは、イエス様に対する信仰が、人の罪を赦すということです。しかも、イエス様が言われた「あなたの罪は赦された」という時の「罪」は、複数形で書かれているので、何か特定の一つの罪ではなく、数々の罪です。イエス様への信仰は、私たちのすべての罪を赦すのです。イエス様を信じる時、私たちのすべての罪が

赦される、それだけは確かなことです。

しかし、イエス様が中風の人に、「あなたの罪は赦された」と言われた時、この場にいた律法学者たちは、心の中でこう言ったと 7 節に書かれています。「**この人は、なぜこのようなことを言うのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、だれが罪を赦すことができるだろうか**」。

律法学者たちは、イエス様は神様を冒瀆していると考えました。なぜなら神様以外に人の罪を赦すことなどできないからです。確かに、神様以外に人の罪を赦すことはできません。なぜなら、イエス様が「あなたの罪は赦された」と言っている罪や律法学者たちが問題にしている罪は、神様に対する罪だからです。神様に対する罪は、神様以外に赦することができないというのは当然のことです。

聖書が語る「罪」というのは、神様に対する人間の罪のことであり、神様の律法を人間が破ることを意味します。神様の律法は、モーセの「十戒」に要約して書かれています。そしてモーセの「十戒」を要約すると、二つのことにまとめられます。一つは、神様を愛すること、もう一つは人を愛することです。神様と人を愛することを、神様は私たちすべての人間に求めておられます。そして、神様と人を愛さないことを、聖書は「罪」と呼ぶのです。神様と人を愛さない人は、誰を愛しているのでしょうか。それは、自分自身です。神様も人も愛さないで、ただ自分だけを愛して生きること、自己中心に生きること、自分のことだけを考えて生きingことを、聖書は「罪」と呼ぶのです。ある人は言うでしょう。私は、人を愛している、家族を大切にしているし、友人も大切にしている、福祉的な働きにも協力的であると。しかし神様を愛しているでしょうか。聖書の神である主なる神様を認め、信じているでしょうか。主なる神様以外の神を神として拝んでいないでしょうか。一週間の内、一日を神様のために安息日として守っているでしょうか。たとえ人を愛していても、神様を愛していなければ、私たちは神様の前で「罪人」なのです。また人を愛しているように見えても、心の中を正直に見たらどうでしょうか。本当に心底人を愛していると言えるでしょうか。自分のために、人を愛しているというようなことはないでしょうか。結局、自分か神様か、自分か人かという選択を迫られたら、やっぱり私たちは、最終的には自分を選ぶのではないのでしょうか。アダムとエバが神様の命令に背いて禁断の木の実を食べた時から、私たちすべての人間は、罪の性質を持って生まれて来て、自己中心に生きるようになったと聖書は教えています。私たちの現実、心の中まで正直に見つめるなら、それを認めざるを得ないのではないのでしょうか。

聖書はさらに、私たち人間の罪は、神様の怒りと呪いに値し、人生でのあらゆる悲惨と死と永遠の地獄の刑罰を引き起こすようになったと教えています。それゆえ、神様に罪を赦されなければ、すべての人間が、人生でのあらゆる悲惨と死と永遠の地獄の刑罰のもとで苦しまなければならないのです。これが、聖書が教える私たち人間の現実です。

そういう現実の中で、イエス様は、四人の人と中風の人を含めた五人のイエス様に対する信仰を見て、中風の人に「あなたのすべての罪は赦された」と言われたのです。律法学者たちは、イエス様は神様を冒瀆していると考えました。なぜなら神様以外に、人の罪を赦すこ

とはできないからです。律法学者たちは、イエス様を神と認めていませんし、信じていません。ですからイエス様が、自分が神様であるかのように罪の赦しを宣言している姿を見て、神様を冒瀆していると考えたのです。

イエス様は 9 節で、『**あなたの罪は赦された**』と言うのと、『**起きて、寝床をたたんで歩け**』と言うのと、**どちらが易しいか**』と言われます。人の罪を赦すことと、人を癒やすこと、どちらが簡単かということです。聖書を見ると、人を癒やすことは、預言者や使徒たちにもできました。しかし人の罪を赦すことは、神様にしかできないことです。それゆえ、人を癒やすことよりも、人の罪を赦すことのほうが難しいのです。そこでイエス様は、「**人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために**」と言って、中風の人に「**起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい**」と言われて、彼の病気を癒やされたのです。彼は立ち上がって、寝床を担いで、この家を後にしたのです。

イエス様は、御自分が全知全能の神であること、御自分が「人の子」、つまり「キリスト」であり「救い主」であることを示すために、彼を癒やされたのです。そして、御自分が罪を赦す権威を持っている神御自身であること、「あなたのすべての罪は赦された」という言葉は、真実であることを示されたのです。言葉だけなら、「あなたのすべての罪は赦された」と言うことは簡単です。しかしその言葉が真実であることを、イエス様は癒しを通して、御業を通して示されたのです。

おわりに

この出来事を通して教えられることは、イエス様は全知全能の神であり、私たちのすべての罪を赦す権威を持っておられるということです。イエス様は、どんな病も癒やすことができ、人の心の中まで見抜かれます。そのような全知全能の神であるからこそ、私たちのすべての罪を赦すことができるのです。

しかし私たちは、そのイエス様を信じなければ、罪を赦されることはできません。律法学者たちは、神様を信じていました。神様だけが人の罪を赦すことができると信じていました。しかし彼らは、イエス様を神様と信じていませんでした。彼らはある意味、神様に対する正しい知識を持っていたけれど、イエス様に対する信仰を持っていなかったのです。それに対して、四人の人と中風の方は、イエス様を全知全能の神であると確信して、イエス様なら必ず何とかしてくれると信じたのです。そして、人を恐れず、心の中であれこれ考えるのではなく、とにかくその場で行動したのです。彼らは、言葉は一言も語らなかつたけれど、とにかくイエス様なら何とかしてくれると信じて行動したのです。その姿をイエス様は「信仰」と呼び、その「信仰」に答えて、中風の方の罪を赦し、病を癒されたのです。

「信仰に生きる」とは、イエス様を全知全能の神と信じて、イエス様なら私の罪を何とかしてくれる、イエス様なら私が抱えている問題を何とかしてくれると信じて、その「信仰」を目に見える形に表していくことではないでしょうか。人の目を恐れず、心の中であれこれ考えるだけでなく、機会を決して逃すことなく、一步を踏み出すことではないでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは生まれながらに罪の性質を持っていて、あなたに従わず、自己中心に生きています。それゆえ、自分の上に神様の怒りと呪いを招いています。しかしあなたは、ひとり子のイエス様をこの世に遣わし、地上で私たちの罪を赦す権威をお与えになりました。

私たちの罪が赦される道は、唯一つしかありません。イエス様を信じる他にありません。どうかあの四人の人と中風の人のように、イエス様を真実に信じることができますように。律法学者たちのように、正しい知識だけで、心の中であれこれ考えるだけではなく、イエス様への信仰を目に見える形で大胆に現わしていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。